

## 昔のことを思い出すままに

大村市 濱崎 信子

国病久原会の皆様 ご無沙汰しております。

先日、国病久原会会長の廣田先生に偶然お会いしました。目がふと出会った瞬間、懐かしいような、嬉しいような、昔に戻ったような感覚が蘇りました。あれもこれも思い出が噴出し、国立大村病院、国立長崎中央病院時代へ、一挙に時間旅行してしまいました。

その時、廣田会長さんから「昔の話をお聞かせ下さい。その話を国病久原会の『会員の声』に記事として投稿してください」と頼まれました。そこで思いついたまま記してみたいと思います。

私は附属看護学校の第7期入学生です。同級生で当院に勤められた、〇〇さん、どうして居られるのか……。看護学校の学生時代、みんな仲良くいろんないたずらをしていましたよ。みんなで真面目な先生にラブレターを書いたりしてね。手術室の手袋に水を入れて凍らして、下を通る上級生を驚かしたりしてね。今だったら怒られるようなこともしましたよ。ほんとに学生時代は楽しかったです。

私事で恐縮ですが、入学した当時はおそらく成績は末席の方ではなかったかなと思っております。しかし読書が好きで図書館からたくさん本を借りて読みました。そのせいか卒業時には、良い成績で卒業できたのではないかと自負しております。そのうちに時間ができたら佐藤愛子さんみたいにエッセイとか随筆みたいなものを書いてみたいと思っておりましたが、あいにく病気のために手が不自由で字がコチョコチョと小さくなってしまってしまうの。だからそれも、叶わなくなりました。

卒業後、看護婦になって、本院の寮で生活を始めましたが、当時は門限が決まっていたね。守衛さんにゴマをすって、時間外に寮に戻れたことなど大変懐かしく思っております。災害や津波等があったら出勤しないといけないでしょう、門限や出入りも厳しくてね。

あの頃の国立長崎中央病院は大変活気に満ちた病院でした。スタッフはみんな廊下を走っていたと思います。副院長先生も「もうしばらく走り続けてくださいね」と言われました。それほど忙しい中であってもスタッフの皆さんたちはお互いとても親切でした。例えば私がストレッチャーを押して廊下を移動していると、それを見た医師が「どれ手伝おうか」といって一緒にストレッチャーを押してもらうのが日常でした。皆一緒になって病院を盛り立てていたような気がいたします。そういえば、看護部長室の前を通ったら、廣田先生が出てきて、「脳波を取るから眠らないで横になっていてね」と言われて、そこでグーグー寝てしまったことがありました。眠らないで横になるなんて無理ですよ。思い出すとおかしくてね。

私は当時、小児科の未熟児医療センターの婦長をしておりました。未熟児医療に関しては、田崎啓介先生と言う大変大物の先生がおられ、この分野の医療に関しては、全国的に見ても最も先進的な活躍をしておられたと思います。そのもとで働いていた増本 義先生は田崎先生から猛烈なしごきを受けられておりました。それに発奮した増本先生はアメリカに数年間留学され、師を超えようとして猛烈な勉強をして帰国され、引き続き当院へ復帰されました。

いつでしたか、日本で初めて鹿児島に 5 つ子が誕生しました。新聞報道で大きく取り上げられました。しかし、低体重児で生まれた赤ちゃんをどのように保育したら良いのか現地では大騒動だったので、未熟児医療の最先端を走っていた田崎先生に教えを乞うために、鹿児島から医師達が見えたりもしました。

2011年3月13日、米倉病院長（看護学校長）のもと、附属看護学校の閉校記念式がハウステンボスで行われました。その時廣田先生の記念講演がありました。あの時にお話しなされた症例の中に、未熟児として生まれたお子さんを、我が子として認めようとする母親の症例がありました。私も当時ずいぶん困りました。

その母親は未熟室に訪れようともせず、保育器の中のお子さんを見るという意思がありません（否認）。母親やその家族は精神科の面接を受けていたとのこと。見ないし、来ないし、名前がつけられない。名前がないと不便でしょう。医師が名付けて A 子ちゃんと呼んでいました。A、B の A です。母親としての気持ちがなかったんでしょうね。その子の顔が赤ちゃんらしくないんですよ。無表情でね。でも、いつもその子を A 子ちゃん、A 子ちゃんと呼んでいる医師を見ると、その子のまなざしの奥に光があるような感じ、表情が違うんですよ。優しみのある顔といますか、、、。あ～よかった～と思いましたね。

そうこうするうちに時折母親が未熟児室にやってきて保育器の中のわが子を離れたところから見るようになりました。

そこで廣田先生と協議を重ね、私が保育器からそのお子さんを取り出して抱いてあやしながら「〇〇ちゃん、お母さんが見えたのよ、嬉しいでしょう」と呟きながら、親子の発達段階でよく見慣れるホールディングのように、母と子が眼差しを合わせながら、胸元でゆりかごのようにスイングする姿勢を見せることから始めました。

母親が接近してきたらタイミングを見計らって、A 子さんをホイとお母さんに差し出して見よう、ということを計画したのです。

いざ実行となると、あまりの思い切った看護行為のような気がして、お母さんが首尾よく抱いてくれるだろうか？その場でそのお子さんを放り出して落としたりする危険はないだろうか？と考えると非常に不安になりましたので、そのケースを増本院長と打ち合わせ、当時精神科医長をされていた廣田先生にも相談しました。看護部長さんにも相談を求めたことがありました。

ある日、勇気を出して、私があやしていたお子さんを、そのお母さんにとっさに渡したところ、両手で受け止めていただき、初めて母親らしい行動をされました。安堵の心をなでお

ろして「廣田先生、うまくゆきました！」と報告しました。看護ではよく実践知といいます  
が、その後の私の看護技術として活かし続けることが出来ました。私も子育て中で時間がな  
くてね。どの子にもと言うわけにはできなかつた。でも生きていればもういくつになるん  
でしょうか…。どうなったのかなあと思い出すんですよ。

今村 甲（ハジメ）先生のことですが、男性を見るとすぐ後を追いかけて接近していく脳性  
小児麻痺のお嬢さんのことで困ったことがありました。多分成長して異性に興味が強い  
ので、大変困ったことが生じるのではないかと心配され、関係機関にあらゆる方法を相談  
したことがありました。そのような倫理問題でもスタッフ間で頭を痛め、病院全体が1人の子  
供にみんな目が届いていて、先生方も病棟で相談に乗ってくださる、あったかい病院だ  
ったと思います。今となつては遠い昔話ですね。こんな思い出話をしたためることで、  
国病久原会の会員の皆様と何かつながりがあればと思っております。

昨今のコロナ時代です、人と人との直接会ってお話をする機会が減ってきてお  
りますので、私の小さな歴史ですけれども、どなたかに読んでいただければ嬉しい限  
りです。ささやかなつながりにお役にたてたら嬉しいです。

代筆;林田幸子(長崎医療センター附属看護学校 第54回生)

えーっ!一桁卒業なんですか!とまずびっくりしました。お若く見えるので。お話を聞  
けて、看護学校の雰囲気や病院の先輩や仲間を楽しく思い出しました。とても優しく  
穏やかに笑顔で話され、私も勇気を持ってその方に必要な看護ができるようにな  
りたい!とエネルギーをいただきました。ありがとうございます。

2回インタビューしましたが、読み上げつつ私が質問するので、収まりがつかなくな  
ってしまつて。文字数や期限を聞いていなかったもので、今日までに聞き取れた範  
囲を記載しました。しかしこういうものは私の主観が入るので、完全な聞き書き  
にはなっておらず、それでも、校正の依頼があれば、まとめた方が  
良いのかなとお尋ねしながら作業しました。

言葉づかいが固いから、もっと柔らかくしても良いのだけれど、とも  
言われましたが、そこら辺は勝手にできないから、濱崎さんらしいきちん  
とした言葉遣いで素敵だと思います。時系列に大体並び変えた事は意図  
的にしましたが、名前や日付など不明なところは確認ができて  
いません。